



頑張ろう ロードレース大会



－鴻陵行事の由来を知り、絆をつなぐ（I）－

「ロードレース大会、なくしてほしい」

昨年暮れの学校評価アンケートで、行事に関する生徒の自由記述には、このようなコメントが複数ありました。一方で、鴻陵祭を前倒しして演劇の伝統をつぶすのは良くない、校外学習でなく修学旅行を、等の意見もありました。ロードレースを含めいずれも、本校の伝統行事であり、今の形には歴史的経緯があります。今週のロードレース大会。苦しいことは避けたい、と単純に思っているわけではないと思いますが、由来を知ってぜひ意義ある行事にして欲しいと思います。

ロードレース大会



今年第66回を数えるロードレース大会は、昭和24年に「校内耐寒マラソン大会」として始まりました。陸上競技部が行っていた江戸川一周の元旦マラソン（学校→松戸・葛飾橋→市川橋→学校）の取り組みがきっかけでした。目的はもちろん、体力と精神力の強化です。総合優勝クラスに贈られる「黒羽杯」は、当時の陸上部顧問・黒羽義治先生の名から来ています。ちなみに、陸上部の元旦マラソンは、市川市にも影響を与え、本校開始の翌年の昭和25年に市の行事「市川市民元旦マラソン」を生み出しています。市内での鴻陵生の存在の大きさを思い、誇りを感じるエピソードです。ともかくもこうして始まった大会。名前を「ロードレース大会」と変え、全学年の行事から1、2年生行事に移行し、個人盾は2連覇（1、2年連続優勝）生徒の名を冠するようになりました。そうして66年。何十年も経過し周辺の建物風景は様変わりしていても、その間を流れる江戸川は今も悠然と流れ続けます。そして、交通事情の変化でコースこそ変わりましたが、若鮎のような鴻陵生は、江戸川堤の寒風を切り裂いて、昔も今も走り続けているのです。これも伝統であり、校風的一端です。今年はPTAの皆さんが、走り終えた生徒に温かい飲み物を用意して応援して下さるそうです。楽しみです。ドリカムの中村正人さんも、作家の真保裕一さんや乙川優三郎さんも、俳優のきたろうさんや伊藤淳史さんも、そして現市川市長の大久保博さんも、先輩たちもみんな走りました。皆さんがその同じ道を、頬を赤く染めながら走る姿は、個人個人の頑張る姿でありながら、伝統の縦糸で見



た時、「鴻陵魂」の絆をつないでいるように感じます。大会では、スターターの仕事を果たしたら、私も同じように走って、伝統の絆を担いたいと思っています。気持ちよく頑張りましょう。（天気がちょっと心配ですが..）

校外学習



次に校外学習です。今年度、先生方で議論を少し整理しました。

「校外学習ではなく修学旅行にして欲しい。」前述の生徒アンケートにありました。この2つの用語は、多くの人が一定のイメージを持って使い分けています。しかしよく見ると、校外での「学習」と「修学」のための旅行と。本来の意味としては、どちらも学ぶことを目的とする真面目なものを指しています。そう、本校の校外学習は「校外で学ぶこと」を真摯に捉え議論して創ってきた経緯があります。修学旅行は、本校が新制高等学校となった1期生の、昭和23年から実施されています。当初、生徒の「校外学習」はたくさんありました。修学旅行、全校遠足、クラス合宿、生徒会合宿、そして部活合宿と校外練習試合等々。そんな中で、修学旅行が「観光」「物見遊山」の要素が強まっていると言う議論が起きました。また、たくさんある校外学習全体のバランスを取る必要性も生じて、修学旅行を一度廃止し、昭和52年から名称を「校外学習」と改め、「地域の調査活動を通じて社会を見る視点を養い、自主性・自律性を身につける」という目的で再出発しました。生徒の方も生徒総会で決議して内容充実を図ったと、その頃の生徒会長だった方からお聞きしました。本校においては、生徒・職員でそのような真面目な議論をして、現在の形となって40年近くになります。これも、伝統であり、他校にない質の高い行事だと思います。しかし、40年経って、校内外の状況に大きな変化が生じてきたことも事実です。変化の詳細は省きますが、それを踏まえて今回、伝統を維持しながら、事前・事後の負担を軽減し、「旅行」の部分も充実できるよう整理しました。楽しい経験や思い出をたくさん作りつつ、学習の名に値する活動も継続して行っていくしたいと思います。鴻陵生の皆さん、ここでも絆はつないで行きましょう。

